テーマ：総合的な学習の時間を通してＥＳＤを伝える

市立札幌大通高等学校長　鈴木　恵一
担当　多文化交流会議

１　趣旨・本校のＥＳＤの特徴

本校は、「定時制・単位制・３部制」の高校であり、幅広い分野にわたり約１００科目の講座が開講されている。渡日帰国生徒、障がいを抱える生徒、不登校経験者や高校中退者、成人の生徒など、様々な背景の生徒が学びを共にし、教科横断学習、国際交流行事、渡日帰国生徒支援等を有機的に繋げた多文化共生教育を行い、「異なる価値観を持った他者を受容できる生徒」の育成に取り組んでいる。また、「社会人として自立していける生徒を育てる」という目標のもと、札幌市をはじめとする「地域社会」で活動されている人材や団体にも協力していただきながら、地域社会に開かれたさまざまな学習やプロジェクトを展開している。このように、ＥＳＤ学習を目的とした授業や行事だけでなく、日々の学校内外の活動そのものがＥＳＤ学習となっていることが本校の最大の特徴である。

２　活動・全体計画

2014 年 8 月～2016 年 3 月　**アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト**

2012 年～2016 年 3 月　**ミツバチプロジェクト**

植物園に隣接という立地を活かし、生徒がバトンタッチしながら１次産業から３次産業までの営みをつくり出す、都市養蜂の活動。

「工芸」を受講する生徒がミツバチの巣枠を製作→「動物の生態」でハチの状態を観察、採蜜→「総合実践」で商品開発から販売実習と会計処理→「書道」・「美術」でラベルや包装デザイン→「フードデザイン」で調理実習→「発達と保育」で中央幼稚園児と連携→「英語」で外国人向け商品パンフ作成→オータムフェスト等で販売→「メディア局」が一連の流れを学校広報→売上収益を次年度の開発費に、という流れで行っている。

2016 年

4 月　**１年次ＥＳＤ学習**

**JNNE 教育ＮＧＯネットワーク　「世界一大きな授業」に参加**

「世界がもし１００人の村だったら」をテーマに１年次が学習した。

7 月　**米国ポートランド市・グラント高校生の受け入れ**

平成 28 年度「札幌市立高校生・ポートランド市グラント高校生交流事業」により、１名のグラントの高校生を 2 週間本校に受け入れた。基本的にホームスティ先の生徒と同じ授業を受け、様々な場面で本校生徒と交流した。

7 月　NGO 韓日社会フォーラムによる韓国高校生の訪問
11 月　Circle The World　（札幌国際教育推進委員会主催　ALT 交流会）に参加
12 月　2 年次 ESD 学習
1 月　NGO 韓日社会フォーラムによる韓国高校生の訪問及び、
　　メキシコ日本語教師会・ベラクルス州立大学言語センターハラパ校生徒訪問

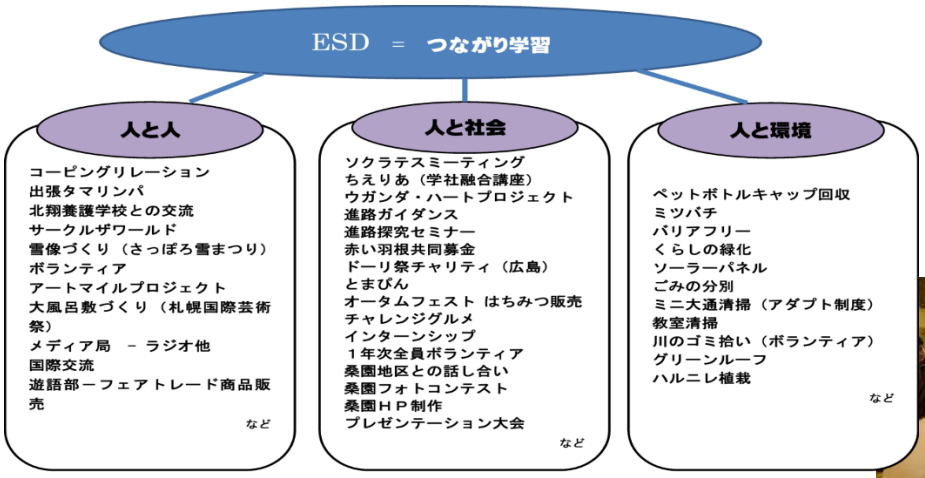
３　活動事例

２の活動内容の中から、総合学習における年次ごとのＥＳＤ学習について紹介する。さらに多くの生徒に、段階的にＥＳＤについて学んでもらうことを目的として、昨年度より取り組みを開始した。　１年次では学校で行われた行事や取り組みがどのようにＥＳＤと結びついているかを考察し、２年次では、自分たちの住む札幌という街を「水」をキーワードにして、これまでとこれからの都市の発展について考えた。これは「水」の利点が私たちの暮らしに生きた例だが、来年度３年次では、「水」がもたらす負の面（自然災害と防災）をテーマとし、学習する予定である。

１年次 ESD 学習「大通高校とＥＳＤ」

本校で取り組んでいるＥＳＤ活動について学び合いを行った。

授業の前半、ＥＳＤの意味を学習し、次にグループに分かれ、自分たちがこれまで校内外で行った活動を書き出した。その後、それらの活動について仕分けを行い「人と人」「人と社会」「人と自然」の３つに分類した。最後は分類した図を互いに発表し合い、これまでの学校内外の活動の多くは実は ESD であったことを再認識した。

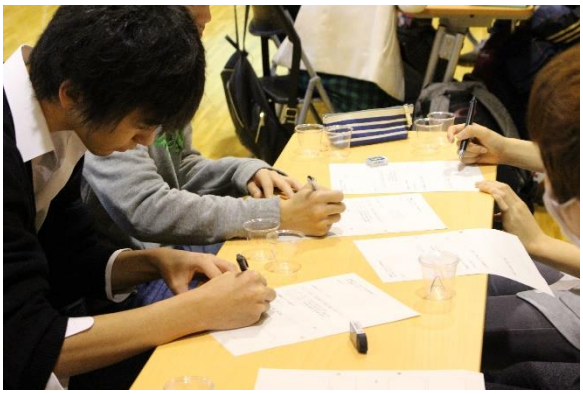


**２年次ＥＳＤ学習　「札幌の身近なＥＳＤ」**

２年次「ＥＳＤ学習」は、１年次を発展させたもので、今年度で２度目の試みである。テーマは「札幌の身近なＥＳＤ」である。札幌には、扇状地から生み出される「伏流水」を利用して発展してきた産業があり（味噌、酒、豆腐など）、街の発展を支えてきた。一方で、その発展とともに失われていったものがあることに気付かせ、郷土「札幌のＥＳＤ」について考えた。

前半は、ＥＳＤの概念を復習したのち、水が湧き出すもととなる札幌の扇状地の仕組みや、本校の近辺に明治時代くらいまであった湧水（アイヌ語で「メム」）について、そして街の発展とともに湧水はなぜ失われたのかを学習した。

後半は、北海道コカコーラボトリング（株）に協力いただき、札幌の水を使った商品について、実演などを踏まえて学習した。



４　成果と課題

総合学習後の反省では、これまで漫然と学習してきたが、実は身近な日々の活動そのものがＥＳＤだと気づき、学ぶことが楽しいと思えたという感想が多かった。

また、国際交流行事を通じ、通訳ガイドやセレモニーの運営など役割を積極的に果たして成長する生徒の姿が見られた。

ESD 学習については、今後も各年次で行えることが望ましいと考えているが、校内での調整が必要であり、そこが本校の課題でもある。本校の取り組みの根底にあるＥＳＤの考え方を、授業や課外の活動を通じて定着させていきたい。